２０１０／１０／１７　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：我が選びの民
聖書箇所：ローマ人への手紙　９章２４－２９節

　ローマ人への手紙の特に８章から、繰り返して「神の選び」について学んで来ました。今日は９章の２４節から見て行きます。確かに、みことばは私たちに、神は人を選ばれるということを教えます。すでに見て来たように、神はイシュマエルではなくイサクを選ばれました。神はエソウではなくヤコブを選ばれました。その真理はある人にとって理解し難いこと、非常に受け入れ難いものと感じます。ですから、パウロはそのような様々な質問に答えを与えるのです。そのことはもうすでに見て来たのですが、もう一度、２２－２３節を見ると、パウロは二つの器について記しています。「滅ぼされるべき怒りの器」と「あわれみの器」です。

◎二つの器について　　２２－２３節

１．怒りの器　：すべての罪人のこと　　２２節

　主イエス・キリストの救いを拒み続けて、神に逆らい続けているすべての罪人のことです。**「義人はいない。ひとりもいない。」**（ローマ３：１０）と言われています。神の前に正しい、神の前に罪を犯していない、神に受け入れられる、そのような人は生まれながらにはだれ一人としていないということです。２２節には**「滅ぼされるべき怒りの器」**とあります。前回、私たちは見たのですが、もう一度、この「器」を見て置きたいのです。というのは、パウロはここで非常に大切なことを教えているからです。新改訳聖書では**「滅ぼされるべき怒りの器」**と訳されていますが、もっと原文に忠実に訳すなら、「滅びを引き起こす怒りの器」、「滅びの原因となっている怒りの器」となります。ここには「引き起こす」という意味をもった動詞が使われているのです。残念ながら、それを日本語ではうまく訳すことができないので、このように**「滅ぼされるべき怒りの器」**となっています。しかし、実はこの動詞がとても大切なのです。ですから、パウロがここで言いたかったことは、神がご自分の意志でこの人は嫌いだから滅ぼそうとされるのではないということです。多くの人はそこに疑問を抱くのです。神がある人を選ぶなら、神が選らばなかった人たちのことは嫌いだから滅ぼそうとされるのかと。みことばが私たちに明確に教えようとしていることは、**「滅ぼされるべき怒りの器」**というとき、つまり、私たち罪人を指すとき、「滅び」という結果を自分の身に招いているのは、罪人自身だということです。だから、この動詞は受身で書かれているのです。ですから、勘違いしてはいけないことは、私たち罪人が滅びるのは罪人であることが原因だということです。罪ゆえに、神の審判を受けるということを言っているのです。神が人に罪を犯させて神が彼らを滅ぼそうとしているのではありません。罪を犯そうという選択は罪人が為す選択であり、それゆえに、彼らはその当然の報いを身に招くということを言うのです。

２．あわれみの器　：神があわれみをもって　　２３節

　２４節にも出て来ますが、これは神があわれみをもって救いへと導かれた者のことです。２３節には**「…神が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、…」**とあります。だれが用意しておられたのでしょう？主語を見るなら分かります。神ご自身が用意しておられたのです。「前もって用意する」と訳すことができるこのことばは、新約聖書にはこことエペソ人への手紙２章１０節にしか出て来ません。エペソ２：１０には**「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをも<u>あらかじめ備えて</u>くださったのです。」**とあります。つまり、これは神の選びのことです。私たちはもうすでにローマ人への手紙８章２９－３０節でこの教えについて学びました。**「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。:30 神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」**、神がそのようなみわざを為してくださった、神が選んでくださったということです。

　そして、今、私たちもそのことをここで再び教えられているのです。神ご自身が選ばれた、神ご自身があわれみの器を用意された、備えられたとも言うことができます。ですから、「さばき」は自らの罪が招いた当然の結果です。さばかれること、その罪のさばきに対して、私たちはだれをも責めることができないのです。自分が罪を選択し罪に罪を重ねたからです。その責任は自分に返って来るのです。だれかがミスをして、たとえば、大切な食器を割ったとします。私たちは罪の性質がありますから人のせいにしたい、今それを洗っているときにだれかが私を呼んだからとか、いろいろなことを言うかも知れません。しかし、実際に割った人がその責任を取る訳です。「さばき」というものは自らの罪が招いた

当然の結果なのです。でも、「救い」は神のあわれみのゆえに与えられた恵みの賜物です。恵みのギフトです。私が何か立派な人間だから、何か良いことをしたからということには全く関係がない、人種にも関係なく、神ご自身がご自身のあわれみゆえに、ご自分が望まれる人に与えてくださった神の豊かな恵みです。

先程も見た様に、滅ぼされるべき怒りの器、つまり、私たち皆そこに属していたのです。滅ぼされてしかるべき者、永遠のさばきに至ってしかるべき私たちを、神が一方的なあわれんでそこから救い出してくださったのです。こんなすばらしい祝福を神は私たちに与えてくださったのです。そして、パウロは「そんなことは不公平だ！」という人々に対して「あなたはいったい何者なのか？」と言います。私たちが知らなければいけないことは、この神にはその様なことを為す権利があるということです。私たちの神、この聖書が教えてくれる唯一真の神には、ご自分のみこころに沿ってすべてのことを行なう権利があるのです。この方はすべての主です。すなわち、比較することの出来ない、最高の、そして、絶対の権力を持っておられるお方です。このお方はすべての統治者です。みこころのままにすべてのことを為されるお方です。そして、驚くべきことは、すべてのことをご自身の栄光のためにされているのです。そして、感謝なことに、私たちの人生に起こってくるすべてのことも、実は、私たちが神の栄光を益々現わす者に相応しく変えられて行くために、神がすべてのことをしておられるのです。このような知恵を持っておられる方は私たちの周りにいません。すべてのことをその目的のためにされているし、そのすべては完璧なのです。

その完璧なお方に対して、絶対者なるお方に対して、すべてを統治しておられるこの神に対して「ご意見申します。」と言うあなたは何者なのか、いったい、私たちがこの神に何を申し上げることがあるのかと言うのです。パウロはそのことを言った後、今日、私たちが見て行く２４節から、再び、この**「あわれみの器」**に関して教えて行きます。

３．約束の成就　　２４－２９節

パウロは**「あわれみの器」**について継続して話して行きますが、彼が言おうとしていることは多くの人々が持っていた疑問に対する答えです。その疑問とは「神の約束はいったいどうなってしまったのだろう？神の約束はもう成就されないのだろうか？」というものです。なぜなら、多くの人たちはイスラエルに与えられた約束を知っていました。イスラエルが特別に祝されると聞いていました。ところが、現実を見るとそうではなかったのです。このイスラエルが神に逆らい続けている、このイスラエルが待望の救い主を拒んでいる、いったい、神の約束はどうなってしまったのだろう？神が訂正なさるようなことがあるのだろうか？と、そのような思いが読者たちのうちにあるので、パウロはここで再び、そうではなく、神が約束されたことはちゃんと成就していると、そのことを教えようとするのです。

１）救いの現実　　２４節

２４節**「神は、このあわれみの器として、私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださったのです。」**、パウロはここで「救いの現実」を述べるのです。確かに、今私たちの間ではユダヤ人だけが救われているとか、異邦人だけが救われているということではなくて、ユダヤ人の中からも異邦人の中からも人々が救いへと至っているのです。確かに、そうです。今は異邦人の時代と言いますから多くの異邦人が救いに至っています。しかし、ユダヤ人たちが全く救われていないのかというとそうではなくて、ユダヤ人の中にもイエス・キリストを信じる者たちが起こされています。このみことばが教えるように、神はその様にしてこの**「あわれみの器」**、神が特別にあわれみを示される者として、異邦人の中から、また、ユダヤ人の中からその人たちを選んでくださったのです。

ですから、ここに**「召してくださった」**とあります。ここで使われていることばは「恵み、救いに与らせるために召し出す、呼び出す」という意味です。パウロはここでも、「救い」という神からのすばらしい祝福は神ご自身が私たちに与えてくださった賜物であると言います。皆さんはもう何度も学んでおられるので、そのことは重々ご承知のはずです。私たちがどんなに心を入れ替えようとしても、どんなに良いことをしようと努力しても、そのような行ないによって私たちは救いに与るのではありません。神ご自身が私たちを召してくださる、神ご自身が私たちを罪の深みの中から、この救いに与るようにと私たちを呼び出してくださるのです。パウロはそのようなすばらしい神の救いのみわざをもう一度ここに記すのです。

２）救いの約束　　２５－２９節

そして、その上でパウロは旧約聖書のみことばを引用して、神が与えられた約束は曲げられてしまったのでもないし、破られてしまうものでもないし、その約束は必ず成就するし、また、成就しているということを教えるのです。

（１）ホセア書から　　２５－２６節

２５－２６節は旧約聖書のホセア書から引用されています。**「わたしは、わが民でない者をわが民と呼び、**

愛さなかった者を愛する者と呼ぶ。:26 『あなたがたは、わたしの民ではない。』と、わたしが言ったその場所で、彼らは、生ける神の子どもと呼ばれる。」、パウロは、今話したように、旧約聖書のみことばから神の計画の正しさを証明しようとするのです。繰り返しますが、なぜなら、「アブラハムの子孫は救われる」という約束をもらった人々にとって「では、その約束はどうなってしまったのか？アブラハムの子孫、すなわち、このイスラエルの民族はこんなに神に逆らっているではないですか？イエスを十字架につけたではないですか？」と思っていたからです。そこでパウロは、旧約聖書のみことばを引用することによって、神の約束は正しく、神の約束は変わっていない、神が約束されたようにすべてのことが成就しているということを教えようとするのです。

このホセア書からのみことばは２：２３と１：１０から引用されていますが、そのことを理解するために、ホセアという人物について、また、その背景を少しだけ説明します。ホセアは預言者でした。当時、イスラエルは北の王国と南の王国に分かれていました。ホセアは北王国イスラエルで活動した預言者の一人です。恐らく、彼はヤロブアム二世の死からアッシリヤ軍の侵攻までの約５０年間に亘って、預言者として活動をしました。ホセアが活動した当時の北王国イスラエルは、政治的にも道徳的にも、そして、霊的にも堕落した状態にありました。そもそもこの北王国は、ダビデの家から別れて自分たちで王を立てて王国を築いたのです。またそれだけでなく、彼らはベテルという町で金の子牛像を造り崇拝するという、そのような罪を犯すのです。全くの偶像としてそれを造って崇拝したというより、自分たちの主の象徴としてそのような像を造ったのです。ところが、罪というのは気をつけなければ小さな罪が大きな罪へとどんどん成長して行きます。最初はそうではなかったのに、それがきっかけで次第に偶像崇拝を受け入れるようになって行き、彼らはいろいろな偶像を持ち込むようになって行くのです。アラムやフェニキアの偶像やバアル、アシュタロテなどに結びついた自然崇拝が行なわれ、もっとすごいことは、子どもをいけにえとしてささげたり、忌まわしい性的放縦がこの北王国では行なわれていました。ですから、この北王国の人々は偶像崇拝、泥酔、放蕩、偽証、暴力、強盗、姦通に没頭していたのです。姦通に至っては宗教儀式の一環としていたと４章に記されています。ですから、非常に神に逆らい続けていた時代です。神のさばきを免れ得ない状態のそのような国にホセアは遣わされて、神のメッセージを語ったのです。

さて、このように大変な罪があるこの北王国イスラエルですが、背景を頭に入れながら見て行きましょう。２５節のみことばはホセア書２章２３節のみことばを引用しています。ホセア２：２３**「わたしは彼をわたしのために地にまき散らし、『愛されない者』を愛し、『わたしの民でない者』を、『あなたはわたしの民』と言う。彼は『あなたは私の神』と言おう。」**。また、２６節のみことばはホセア１：１０**「イスラエル人の数は、海の砂のようになり、量ることも数えることもできなくなる。彼らは、「あなたがたはわたしの民ではない。」と言われた所で、「あなたがたは生ける神の子らだ。」と言われるようになる。」**の引用です。皆さんに見ていただきたいのは、ローマ書９章に**「わが民」**、**「愛する者」**と記されていますが、これはいったい何のことを言っているのかということです。

そのことを理解するためにはホセア書の内容を見る必要があります。１：２－９をご覧ください。神はホセアに何を命じられたのでしょう？神はホセアにゴメルというひとりの女をめとるようにと言われます。この女は姦淫の女でした。**「:2 主がホセアに語り始められたとき、主はホセアに仰せられた。「行って、姦淫の女をめとり、姦淫の子らを引き取れ。この国は主を見捨てて、はなはだしい淫行にふけっているからだ。」**と、このことは先ほど説明しました。

◎最初に生まれた子は名前をイズレエルと名づけた。

「:3 そこで彼は行って、ディブライムの娘ゴメルをめとった。彼女はみごもって、彼に男の子を産んだ。」、多くの学者たちは最初に産まれた男の子はホセアとの間に産まれたのだろうと言います。その名前は**「イズレエル」**です。**「:4 主は彼に仰せられた。「あなたはその子をイズレエルと名づけよ。しばらくして、わたしはイズレエルの血をエフーの家に報い、イスラエルの家の王国を取り除くからだ。:5 その日、わたしは、イズレエルの谷でイスラエルの弓を折る。」**と続きます。この**「イズレエル」**という名前は「神は蒔かれる、神が蒔いてくださるように」と、ちょうど、種を蒔くようにという意味があることばです。そして、イズレエルとは町の名前です。イスラエルの１２の部族がカナンの地をそれぞれ相続したとき、イッサカルの部族が相続した場所、それがこのイズレエルです。ガリラヤ湖から１５キロ南西の方に下った所の町です。このイズレエルの町でアハブとその妻イザベルによってイズレエル人ナボテの血が流され、そして、今度はイスラエルの王であったエフーによってイザベルへの血の報復とアハブの家へのさばきが行われたのです。ですから、このような行為に対する神のさばきの象徴として、このような名前が付けられたのですが、なぜ、神はホセアにこのような名前を付けるように言われたのでしょう？その後を見て行くと、**「わたしはイズレエルの血をエフーの家に報い、」**と書かれています。そのような歴史的背景があった

のです。このことをゴメルに戻すと、ホセアはゴメルに対して忠実を尽くしましたが、彼女は彼に愛されていながら姦淫の罪を犯し続けて行くのです。

◎二人目はロ・ルハマと名づけた。

６節**「ゴメルはまたみごもって、女の子を産んだ。主は彼に仰せられた。「その子をロ・ルハマと名づけよ。わたしはもう二度とイスラエルの家を愛することはなく、決して彼らを赦さないからだ。」**、とても付けたくない名前がここに出て来るのです。というのは、この名前、ロ･ルハマとは「愛されない」という意味です。先ほど見たように**「彼に男の子を産んだ。」**と記されている３節と、６節に**「ゴメルはまたみごもって、女の子を産んだ。」**と違った書き方がされていることから、多くの学者たちは一人目はホセアとの間の子どもだが、二人目の女の子はホセアとの間の子どもではなかったと言います。三人目もそうです。書き方が違うのです。つまり、このようにゴメルは夫から愛されているにもかかわらず、彼女は姦淫を犯し続けているのです。まさにこのイスラエルの姿です。ですから、**「わたしはもう二度とイスラエルの家を愛することはなく、」**と書かれています。

◎三人目はロ・アミと名づけた。

７－９節**「しかし、わたしはユダの家を愛し、彼らの神、主によって彼らを救う。しかし、わたしは弓、剣、戦い、および馬、騎兵によって彼らを救うのではない。」:8 ゴメルは、ロ・ルハマを乳離れさせてから、みごもって男の子を産んだ。:9 主は仰せられた。「その子をロ・アミと名づけよ。あなたがたはわたしの民ではなく、わたしはあなたがたの神ではないからだ。」**、**「わたしの民ではない」**というのがこの名前の意味です。

これらのことを私たちが頭に入れておくなら、先ほど私たちが見たローマ人への手紙でパウロが言わんとしていることがはっきりします。このホセアとゴメルの関係は、選民でありながら神に対して不従順だったイスラエルの神への態度を表わしています。神がイスラエルの民を選び、イスラエルを愛し続けているにもかかわらず、イスラエルは神に対し不従順の限りを尽くしているからです。まさに、私たちはその関係をここに見ることができるのです。そして、この三人の子どもの名前は、まさに、このイスラエルへのさばきを現わしているようなものです。

◎罪ゆえに、彼らは種のように撒き散らされる

最初の名前はイズレエル、「種を蒔かれる」、後で触れますが、イスラエルは罪のゆえにアッシリヤによって補囚の目に合いました。ユダはバビロンによって補囚の目に合いました。最近では、紀元７０年にイスラエルは国を失いました。１９４８年まで続きました。そのように彼らは散らされて行きました。何が原因だったのか？罪です。

◎罪ゆえに、彼らはこの世からも「愛されない」

不思議なことですが、特に、第二次大戦ではユダヤ民族だけが憎まれました。

◎罪ゆえに、彼らは神に見捨てられる

三つ目に、彼らは神に見捨てられます。「わたしの民ではない。」と。確かに、イスラエルの罪ゆえに、彼らはそのような経験をして来ました。

罪ゆえに彼らは散らされ、大変苦しい目に合い、そして、あたかも神に見捨てられたように、神の助けがない、その様なことを彼らは経験したのです。そのことはこのイスラエルの歴史を見ると何度も教えられることです。しかし皆さん、それで終わっていないのです。ホセヤ書を見てもその通りなのですが、そこに常に「神のあわれみ」があるのです。主なる神はこの罪を犯したイスラエルを再びあわれまれるのです。私たちはそのことを何度も見ているのです。ですから、ここでパウロが言いたいことは、イスラエルの歴史を見たときに、確かに、ホセヤ書はイスラエルの人々に対して書かれていますが、それを見たときに、あなたたちはその罪ゆえにこのようなことを経験するが、「わたしはまた再びあなたたちをあわれむ」と言われ、実際にそのようにされたことです。

そして、パウロは「それは人類の歴史を通して神がなさっておられることです。イスラエルだけでなく、私たち異邦人に対しても、神は同じようにあわれみを示してくださっている。」と、そのことを言わんとするのです。先ほど見たように、神はイスラエルに対して「彼らはもうわたしの民ではない。」と言われた。でも、その民は再び「わたしの民」と呼ばれるということです。これは「あわれみ」です。「赦し」です。「愛さない」と言われた者たちが、再び「愛する者」と呼ばれるのです。そのように、神は罪を犯したイスラエルに対して深いあわれみをもって、彼らをもう一度このすばらしい祝福へと導いてくださるのです。

そして、９：２４で見たように、この神のあわれみはユダヤ人だけに及んだのではなくて、私たち異邦人にも及んだのです。ですから、両者に変わりはないと言うのです。罪を犯したユダヤ人が神によってあわれまれ、そして、神の祝福をいただくように、私たち異邦人も神の前に罪を犯し逆らっていたけれど、神のあわれみによってこの救いの中に招かれると。Ｉペテロ２：１０をご覧ください。**「あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわ**

れみを受けた者です。」、信仰者の皆さん、私たちがしっかり覚えなければならないことは、私たちはイスラエルの人々に対して指を指して「なんてひどい人たちだ！」とは言えないということです。なぜなら、神に逆らい続けて来たのはイスラエルだけではありません。私たちもそうだからです。

しかし、今私たちがこうしてこの救いを喜んでいるのは、この救いを楽しんでいるのは、私たちが何かをしたからではないのです。神の深いあわれみによって私たちをこの救いへと招いてくださった、その神のあわれみを私たちは忘れてはならないのです。パウロがまず私たちに言うことはそういうことなのです。このホセア書のみことばを通して、彼はこのように罪を犯した者たちに神のあわれみが及んだと言い、そして、そのみことばを使って、パウロはそのあわれみはユダヤ人だけでなくて、私たち異邦人にも及んだということを言うのです。

（２）イザヤ書から　　２７－２９節

そして、２７節を見ると彼はイザヤ書の引用を使います。２７－２８節**「また、イスラエルについては、イザヤがこう叫んでいます。「たといイスラエルの子どもたちの数は、海べの砂のようであっても、救われるのは、残された者である。:28 主は、みことばを完全に、しかも敏速に、地上に成し遂げられる。」**、これはイザヤ書１０章２２－２３節からの引用です。**「たとい、あなたの民イスラエルが海辺の砂のようであっても、その中の残りの者だけが立ち返る。壊滅は定められており、義があふれようとしている。:23 すでに定められた全滅を、万軍の神、主が、全世界のただ中で行なおうとしておられるからだ。」**。ローマ９：２８に**「主は、みことばを完全に、しかも敏速に、地上に成し遂げられる。」**、神が約束されたそのさばきが敏速に起こると言っています。北王国イスラエルも南王国ユダも罪ゆえに、アッシリヤ、バビロンによって彼らは神のさばきを実際に経験しました。神が言われたようにさばきがやって来たのです。ですから、今の時代においても神の警告は同じです。罪はさばかれる、この世はさばかれるということを警告しています。

確かに、そのことをみことばが教えるのですが、同時に、このことも教えます。それはこのようなさばきが下った中にあっても、神が守った人々がいたということです。２７節に**「たといイスラエルの子どもたちの数は、海べの砂のようであっても、」**とありますが、アブラハムはそのような約束をいただきました。創世記１２章の初めにその約束が記されています。確かに、イスラエル民族はそのように大変な数になりました。しかし、このような神からのさばきによってこの民族は根絶やしにされるようなことを経験するのです。しかし、続いて２７節には**「救われるのは、残された者である。」**とあり、神はすべてを滅ぼされるのではなく、神はある人々を残しておられるのです。この**「残された者」**「残りの者」という名詞の前には原語では定冠詞があります。すなわち、この**「残された者」**とは神が選んだ人たちのことです。偶然に生き残った人たちのことではないのです。

みことばが教えることは、すべての民族が滅ぼされるようなそのようなさばき、戦いの中にあっても神ご自身がある者たちを残していたということです。偶然ではなかったのです。神のみわざが為されたのです。エリヤのことを思い出しませんか？「イスラエルの人々によってすべての預言者が殺されてしまって、残されたのは私一人だけ、でも、彼らは私のいのちを狙っている。」と、そのようにエリヤが非常な恐れを抱いたときに、しかも、すべての人が滅ぼされたように思っていた中で、神が言われたことはローマ１１章４節**「バアルにひざをかがめていない男子七千人が、わたしのために残してある。」**、このみことばはⅠ列王記１９：１８のみことばです。**「しかし、わたしはイスラエルの中に七千人を残しておく。これらの者はみな、バアルにひざをかがめず、バアルに口づけしなかった者である。」**。エリヤがここで学んだことは神の約束です。神の選びです。**「わたしはイスラエルの中に七千人を残しておく。」**と、このようなことが言えるのは絶対者なる神しかいません。このように断言できるのは神だからです。神のみこころが成されているのです。神の計画が成されているのです。海べの砂のように数え切れないほどいたイスラエルがすべ滅ぼされるように思えても、神はご自分の計画に基づいて、そこに残された者をおいておられるのです。偉大な神です。

ローマ９：２９を見るとイザヤのもう一つの預言が出て来ます。**「また、イザヤがこう預言したとおりです。「もし万軍の主が、私たちに子孫を残されなかったら、私たちはソドムのようになり、ゴモラと同じものとされたであろう。」**、これはイザヤ書１章９節の預言です。**「もしも、万軍の主が、少しの生き残りの者を私たちに残されなかったら、私たちもソドムのようになり、ゴモラと同じようになっていた。」**。ここでもパウロは神のあわれみを言います。あのソドムとゴモラのことを振り返ってみたとき、そこに残されたのはロトと娘だけでした。彼の妻は塩の柱となってしまいました。その後、この町のすべての者たちは彼らの罪ゆえに滅ぼされてしまいました。そのようなことが起こってもおかしくない、しかし、神は子孫を残してくださった、神はちゃんとその中にあっても生き残る人々をおいてくださったのです。もし、この神のあわれみがなかったら、あのソドムとゴモラと同じように、すべての者たちが滅ぼされたことだろう。すべて神のあわれみだというのです。

神のあわれみについてエレミヤ自身はこのように言っています。哀歌３：２２**「私たちが滅びうせなか**

ったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。」と、ここに**「主の恵みによる」**ということばが出て来ます。神が南王国ユダの罪をさばかれたのです。ところがエレミヤは**「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。」**と言います。この**「主の恵みによる」**ということばは「神の誠実な愛、忠実な愛」と訳すことができることばです。つまり、どのみことばを見ても私たちに神が教えてくださることは、私たちに神の愛をいただく資格があるからではない、私たちが神の前に神が気に入ってくださる何かをしたからではない。神が愛に満ち溢れた方であり、あわれみに溢れた方であって、私たちだれ一人として滅び以外に何もふさわしくない者たちの中に、神はある者たちを残されたということです。ご自分の目的のためにある者たちを選ばれたのです。私たちはみな神の民ではなかったのに、神は異邦人である私たちも「わが民」と呼んでくださったのです。愛される資格のない私たちを神は「わたしの愛する者」と呼んでくださったのです。そのように、神の一方的なあわれみによってこのような祝福の中に招き入れられたと言うのです。すべて神のあわれみ、すべて神のご愛なのです。

あなたが今こうして、永遠を見て、天国を喜んで、その日を待望しながら生きて行くことが出来るのは、神が成してくださったみわざゆえです。あなたのどこの部分も、あなたの歩みにおいても、あなたの為して来られた奉仕においても、神がそれを見て心を変えるようなことは何一つないのです。私たちはだれ一人として神の民と呼ばれる者ではなかったし、私たちはだれ一人として神に愛されるような者ではなかったのです。でも、そのような私たちを神はあわれんでくださったのです。

アブラハムへの約束はどうなってしまったのか？パウロは言います。「主なる神は約束を果たされた。」と。どのように？アブラハムに与えられ約束は「神はその子孫を大いに祝してくださる。」でした。「でも、実際にイスラエル民族はそうではない。」と人々は言います。ですから、パウロは言うのです。ガラテヤ人への手紙３章７－９節**「ですから、信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい。:8 聖書は、神が異邦人をその信仰によって義と認めてくださることを、前から知っていたので、アブラハムに対し、「あなたによってすべての国民が祝福される。」と前もって福音を告げたのです。:9 そういうわけで、信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。」**、パウロが言っていることは「このイエス・キリストを信じる者たち、彼らは霊的にアブラハムの子孫である。神がアブラハムを通して約束されたように、アブラハムの子孫が祝される。ユダヤ人だけでない異邦人が、すべての国民が祝される。しかも、そのユダヤ人の中で、異邦人の中で、神によって特別に選ばれた者がこの祝福に与る。」ということです。そして、実際に歴史を振り返ってみても、現実を見ても、神は異邦人の中からユダヤ人の中から、私たちをこのすばらしい救いへと招いてくださったのです。

救われている者たち、救いをいただいた者たち、彼らこそがアブラハムの霊的な子孫であると、パウロはそのことを教えるのです。人々は思っていました。「この約束は、イスラエル民族すべてが救われるということだ。」と。でも、パウロは言います。「この約束はイスラエル民族だけにではない。アブラハムも神を信じるその信仰によって救いに与った。同じように、この神の救いのメッセージを信じて救われた者たち、それがこのアブラハムの霊的な子孫だ。」と。ですから、神の約束が曲げられたとか、神の約束が破られたのではなく、神の約束はそのように成就しているのです。パウロはその真理を教えようとしているのです。神が言われたことはそのようにちゃんと成就しているのです。

最後に、今日私たちはこの「あわれみの器」について見て来ました。「怒りの器」と「あわれみの器」の二つがあること、そして、「怒りの器」だった私たちが、神の一方的なあわれみによって「あわれみの器」と変えられたと、私たちはそのことを見て来たのです。９：２３の後半に**「その豊かな栄光を知らせてくださるためになのです。」**とあります。これは、私たちが何のために「あわれみの器」とされたのか、その目的を言っているのです。あなたがこのすばらしいあわれみをいただいてこの救いに与った、その目的です。それは、この偉大なる主なる神のみ力を、そのみ恵みを、そのみ栄を明らかに示すためです。そのようにみことばが私たちに教えているのです。

よく考えてください。神はなぜがあなたを「あわれみの器」としてこのようにあわれんであなたを救いへと招いてくださったのでしょう？あなたの罪を赦してくださって、あなたを生まれ変わらせてくださったのでしょう？神があなたをあわれみの器とされたその目的は、神の栄光を知らせるためです。私たち自身もそのことを知っていました。救いを通して神がどんなに偉大な方かを教えられました。しかし、それで終わっていないのです。私たちはこの神の豊かな栄光を知らせて行く必要があるのです。私たち信仰者は、少なくとも、この神のすばらしい祝福をこの世にあって誉め称えることです。私たち自身がこのすばらしい救いをくださった神のことを称えながら、この神を愛して従って行くことによって、私たちの周りの人たちは知ります。なぜ、アンテオケで初めて、ある一部の人たちのことを「クリスチャン」と呼んだのでしょう？そこから初めてこの呼び名が生まれたのです。それは彼らがキリストに属する者としてキリストのことを話し、キリストを誇っていたからです。ですから、彼らはヘロデではなくてキリストに従う者だから、従う者、属する者、キリストに従う者、「クリスチャン」と呼んだので

す。彼らの生き方、彼らのことばがそのような呼び名を生み出したのです。彼らは救われた者として生きていたのです。神のあわれみによって救われた者として、すばらしい神の栄光を放っていたのです。

私たち信仰者はそのことを覚えなければいけません。何のために私たちは救われ、そして何のために今私は生かされているのか？信仰者の皆さん、自分の好きなことをするために神が私たちのためにいのちを捨ててくれたのではありません。私たちは自分の幸せのために生きているのではありません。私たちは神のすばらしさが世に証されるために生きているのです。なぜなら、そうすることによって人々は、私たちをこんなに愛してあわれんで救ってくださった神のすばらしさを見るからです。皆さん、そのために生きていますか？何となく一日を過ごしていませんか？毎日の忙しさの中で、見なければいけないものを見ていない、そんな生活をしていませんか？

パウロがテモテへの手紙第２の中でこんなことを言っています。Ⅱテモテ２：２０－２１**「大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。また、ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用います。:21 ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。」**。あなはどのような器ですか？神ご自身が尊いことにお用いくださるような器でしょうか？それとも卑しいことにしか用いられない器でしょうか？その「カギ」は何でしょう？私たちが神に対してどのように生きるかということです。罪から離れて正しく生きるかどうかです。神が喜んでくださる者として生きているかどうかです。そうでなければ神はあなたをお使いになれないのです。それはものすごく惨めな人生です。神の栄光のために救ってくださったのに、その目的を忘れて、自分の目的のために生きているなら…。少なくとも、神に用いていただきたい、神にとって役に立つ者として尊い者として、神のすばらしいみ栄のために用いていただきたいと、そのように願われませんか？もしそうなら、罪から離れることです。神が忌み嫌われることから離れることです。

この中にもしイエスを信じていない方がおられるなら、あなたが永遠のさばきを受けるその責任はあなた自身にあります。あなたの罪が原因です。いつまで経っても神に逆らい続けるあなたが原因です。「私は選ばれているのかどうか分からない。選びを為す神は不公平だ、おかしい。」と、もしそのように言われるのなら、あなた自身が神の為していることを考えることです。神の恵みを聞きながら、あなたは自らの意志をもってそれを拒み続けているのです。神があなたを拒んでいるのではありません。あなたが神を拒んでいるのです。ゆえに、あなたに一番相応しいさばきがあなたを待っているのです。

２２節のみことばには**「もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、」**とあります。あなたがさばかれるときにその力が明らかに示されます。あなたの罪が神の前でさばかれるときに、神ご自身はご自分の聖さ、正しさを明らかに示されるのです。そのときにはもう手遅れです。今日、私たちが見て来たことは、神は私たちをどれほどあわれんでくださっているのかということです。信仰者はそれをしっかりと覚えることです。あわれみのゆえに、私たちはこのような恵みに与ったのです。そして、神の真実さ、神の約束は必ずそのようになる、もう、なっているのです。すべての国々が、人々が祝されると、そのあわれみの内に私たちも招き入れられたのです。

神が言われたことは必ずそのようになるのです。それが私たちの神であり、それが私たちがこのみことばから教えられることです。信仰者の皆さん、しっかり、このみことばに立つことです。みことばが教えることは必ずそうなります。神がおっしゃったことはそのようになるのです。必要なことは、私たちがその神のみことばに信頼を置いて確信を置いて生きる者となることです。あわれみを思い出してください。どんなあわれみによってあなたが救われたのか？思い出してください、どんなに偉大な忠実な神なのかを。この方は絶対者です。約束されたことは必ず成すお方です。だから神なのです。

しっかり主を見上げて約束に立って歩む信仰者として、神の栄光を現わしてください。